

2020 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、図 1 のように、学長を委員長とした全学 FD・SD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD・SD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会および学部での FD に関する諸活動をそれぞれ 2008 年度より新しく改変した組織である。また、主管部署として、大学企画室高等教育推進部（教員 2 人、事務員 3 人で構成）が FD 活動の推進・支援を行っている。

さらに、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が 2017 年 4 月 1 日から施行され、SD (Staff Development) が義務化されたことを受けて、本学の教員・職員のキャリア形成を図る組織的な取り組みを推進するため、2019 年度に全学 FD 委員会を全学 FD・SD 委員会に再編し、その専門委員会として SD 活動 WG を新たに設置した。全学 FD・SD 委員会により企画・開催される FD プログラムは、大学教育を支援する職員の SD プログラムとしても機能しており、職員も教員と共に参加することで自らの職務遂行上の資質向上に役立てている。

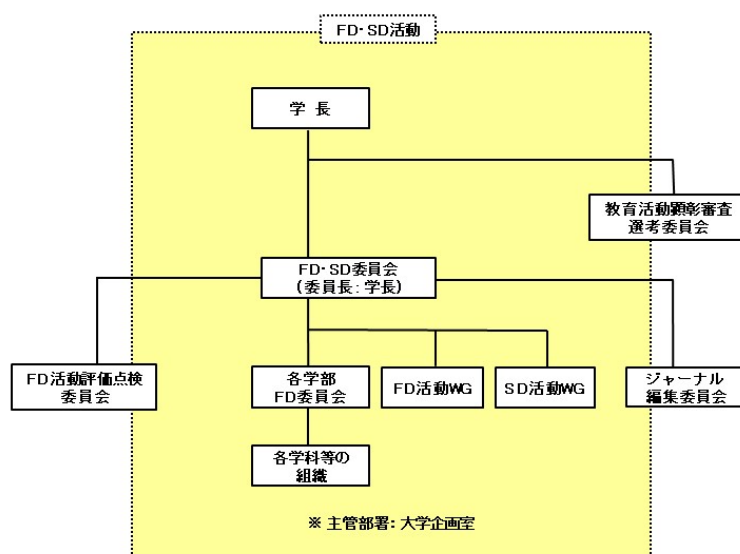


図 1 中部大学の FD・SD 活動組織図

FD・SD 委員会：本学の FD・SD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

SD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、SD 活動の全学的な推進を図る。

FD 活動評価点検委員会：本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会：教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

ジャーナル編集委員会：FD・SD 委員会の専門委員会として、高等教育（大学教育）全般に関する研究成果、および本学での教育に関する分析研究、実践報告等を学内外に発表するために『中部大学教育研究』を発行する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD・SD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教員活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けにホームページ上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部・研究科対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教育科対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1) 非常勤講師を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムの構築や改良、出版など (*2)
	授業担当者	

(*1) : 対象別 1) ~3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2) : 授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築や改良、および出版などが該当

3. 2020 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2020 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

工学部の教員の『魅力ある授業づくり』に関する意識およびスキルを向上させるための FD 活動を推進する。

- 1) 「中部大学教育活動顕彰制度 受賞者による講演会」を開催し、受賞者より『魅力ある授業づくり』について講演頂き、各教員のスキルアップにつなげる。
- 2) 『魅力ある授業づくり』に相応しい話題を見つけ、工学部 FD 講演会として随時開催する。
- 3) 遠隔授業に関する技術的サポートのための情報収集を行う。また、場合によっては、技術指導のための講演会、工学部 FD 委員会委員から学科内への展開を通じて、情報共有を行う。
- 4) 「CU ルーブリックライブラリ」「Cumoc」を積極的に活用し、授業に反映させ 『魅力ある授業づくり』に努める。そのための講演会を開催する。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- 1) 夏の教育活動顕彰制度で表彰された先生方を中心に、秋学期に、表彰記念報告会を行い、全教員が情報を共有する。
- 2) 必要に応じて、専門の講師を招待して、経営情報学部主催の FD 講演会を開き、今後の FD 活動の指針とする。
- 3) 『魅力ある授業づくり』の基礎をなす「学生による授業評価」への参加を向上させる。

(3) 国際関係学部

【授業・教授法の改善】

現在、本学部が重点を置く以下の項目に関して、「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していく事で、本学部の『魅力ある授業づくり』に資する内容の FD 活動としていきたい。

- ・学生と協働して創り出していくまったく新しいスタイルの授業「ハイブリッド・プロジェクト」の実施を通じて、学生の最新の学修ニーズを確認した後、学部構成員による情報共有を推進、他の授業科目にもフィードバックし、専任教員が担当する授業のより一層の質の向上を推進する。またこの新たなスタイルの授業を多くの教員が担当することで、教員側の成長をも図る。
- ・低学年向けの演習系の科目（スタートアップセミナー、国際基礎演習、国際応用演習 A、同 B）に関しては、学年・学期ごとに「コーディネーター」としてまとめ役の責任者を決め、授業の事前と事後のフォローアップを担当者全員で行い、学生の学習状況の把握に努める。またコーディネーターを持ち回りにすることで、すべての教員が科目内容の改善や質の向上に参加するようにする。
- ・「国際関係学部 Web ポートフォリオ」の一層の活用を図る。

【学部全般の運営についての検討】

- ・「卒業研究」への取り組みについて、本学部が多ディシプリンの専門領域を持つことに鑑み、2019 年度より開始した「卒論閲覧会」等を通じ、教員間に共通の認識を醸成する。
- ・2019 年度より試行している学生主体の「外国語スピーチエキシビジョン大会」を契機に、外国語を中心とした学生の自学習を推進する体制づくりを行う。
- ・学部の講演会、研究会、シンポジウムなどをできるだけ多く実施し、「授業外の学びの機会」を提供していくことで、学生のモチベーションの向上と、教員の知見を深める。

(4) 人文学部

1) FD 活動の目標

- ① 高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図る。

- ② 学生の主体性を育成するための『魅力ある授業づくり』の実現に向けて取り組む。
- ③ 学生と教員によるフィールドスタディを通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化する。

2) FD 活動の計画

人文学部では各学科の特性を生かしつつ、複雑化する現代社会の課題に応えることのできる「確かな学力」と「コミュニケーション能力」を兼ね備えた「あてにされる人間」の育成を目標とする。学生には学内および課外活動を通じて人と積極的に関わることで多様な視点を獲得し、主体的に考え行動できる力を身に付けさせる。

- ① 各教員が学生ポートフォリオの活用をとおして日々の学習態度に関する情報を共有し、学力向上・維持に向けた意見交換を図る。併設校を中心とした高大連携の強化および各学科にて初年次教育を細やかに実践し、かつ独自のピアサポーター制度を活用することにより、恵那研修等の行事をとおして1年次から自己の将来像を意識させることに取り組む。
- ② 『魅力ある授業づくり』に関し、学生・教員の「授業評価」への参加を向上させ自己の授業改善に努める。秋学期には、教育活動顕彰制度で表彰された教員の報告会を行い、意見交換を図る。
- ③ 自己点検・評価における全学的課題のうちの「シラバスと講義内容との整合性の検証」について、各学科で検証方法、および問題があった場合の対応方法を確立し、実施する。
- ④ 自己点検・評価における全学的課題のうちの「内部質保証体制の充実」について、毎年の自己点検・評価の書類を提出する前に学科間で客観的視点からチェックし合い、要改善点等の認識も織り込んで提出するようにする。
- ⑤ 従来の講義形式と学生に能動的な学修を求める参加型学習法である双方向型授業を組み合わせた授業や学科横断的な授業に取り組むこと。学部所属教員全体に本学部および本学のFD/SD・初年次教育関連の講演会・セミナー・研修会への積極的な参加を促す。

3) FD 活動の実践に向けて

『魅力ある授業づくり』とは、「学生と教員が協同して行うもの」である。学生に興味を湧かせ将来役に立つ授業および教員にとって学生の成長を実感し、常に学生から感化を受ける授業を意識しながら、学生との日頃のコミュニケーションに基づき、学生にとってわかりやすい『魅力ある授業づくり』を推し進め、学部全教員はそれを実現できるようにFD活動を行う。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

1) 応用生物学部 FD 推進委員会

○委員会の開催

定期的に委員会を開催し、2019年度FD活動の評価点検、2020年度目標達成への活動推進、2020年度の活動目標の設定を行うほか、必要時にはメールにて審議・連絡を行う。

○学部FD活動目標

－FD活動の見える化、共有化を目指す－

○『魅力ある授業づくり』に関する目標

- ① 『魅力ある授業づくり』に関して、授業改善につながる学部内の報告会や意見交換会を計画する。特に、教育活動優秀賞を受賞した教員をパネラーとした討論の場を設け、授業改善に向けた情報共有を行う。
- ② 『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業評価、および

コメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。

③『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。

④ 学部 FD 講演会開催

多様化する学生を支えるため、学生サポートや授業改善に関する講演会や意見交換会を開催する。

⑤ 各教員は、全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。

2) 学科（専攻）、研究科等

学科会議、研究科委員会などを通して定期的に FD 情報（教務モニター、授業アンケートなど学生の意見、FD 講演会その他の内容等）の交換を行い、必要に応じ目標設定を行う。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

1) [学部] 春学期中に授業検討会を行い、学部の共通の課題を議論すると共に、学生にとって有用な魅力ある授業となるように課題解決を目指していきたい。

2) [学部] 実習科目、演習科目については可能な限りルーブリック評価の導入を目標にする。

3) [学部] 各学科の特色をより活かした教育につながる FD 活動もあわせて実施する。

4) [大学院] 大学院特論等において、授業評価アンケートを実施し、その結果を担当教員で共有することにより授業改善に役立てる。

5) [大学院] 大学院担当教員は学部教員とほぼ重複するため、学部における FD 活動内容を共有して大学院教育に活かす。

6) [大学院] パンフレット「研究の心得」を活用し、より一層の教育・研究の内容を高める。

7) 秋学期の終了時に、学部・研究科教員全員を対象にした『魅力ある授業づくり』につながる FD 講演会（研修会）を計画する。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

1) FD 活動の目標

①現代教育学部

・現代教育学部教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上

・現代教育学部における現状と課題についての共有

・新しい大学教育、特にアクティブ・ラーニングに対応したカリキュラム開発の研究

・理系学部を持つ利点を生かした他学部との教育・研究交流の実現による特徴ある教育・研究の創発

②大学院教育学研究科

・学部、現代教育学研究所と連携した授業改善と大学院教員の資質の向上

・他大学・他学部との研究交流の実施による教育・研究の創発

・教育モデル構築の取り組み

・院生への情報提供ネットワークの活性化

・共同研究と外部資金獲得の試み

2) FD 活動計画

①現代教育学部

工学部などとの連携を通して、理系学部をもつ中部大学の特徴を生かした現代教育学部の教育に関する新たな試みを模索する。そのために、年度当初に工学部都市建設工学科および情報工学科などとの連携を目的として、FD&SD 講演会を開催し、互いの研究内容

を把握して、今後の研究交流の方針を定める。そのための年度当初の計画は下記のとおりである。

[1] 2020年4月中旬 第1回現代教育学部 FD&SD 講演会開催(大学院 FD との共催)

講演① 講演者：工学部都市建設工学科の教員に依頼

講演題目：「(仮題) 現代教育学部・教育学研究科と工学部都市建設工学科との研究・教育に関する連携」

[2] 2020年5月中旬 第2回現代教育学部 FD&SD 講演会開催(大学院 FD との共催)

講演① 講演者：工学部情報工学科の教員に依頼

講演題目：「(仮題) 現代教育学部・教育学研究科と工学部情報工学科との研究・教育に関する連携」また、現代教育学部および大学院の教員の教育・研究のポテンシャルを高め、『魅力ある授業づくり』のための力量向上を目指して、学内外からの講師を招聘し、年度内に数回の FD&SD 活動を実施する。

②教育学研究科

教育学研究科として、学内他学部との教育・研究連携を強化し、研究・教育の一層の発展を目指すために、現代教育学部において実施される FD&SD 活動と連携し、FD&SD 講演会を共催するとともに、研究科が主催して FD&SD 講演会を実施し、構成員の教育・研究活動の推進を図る。

(8) 人間力創成総合教育センター

センター設置の理念の下、センターの FD 活動の継続的推進を図る。EP を越えた FD 活動はどのようにあるべきかについても議論し、各 EP が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、懇談会・研修会の実施、教材提供等による教員間の共通理解の形成を図る。さらに魅力ある授業づくり等に向けての取り組み（例えば、授業方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等）のための学外の研修会や教育関連学会への参加等の各種方法についても検討する。

特に、教育経験の浅い教員が十分な教育経験を有する教員との交流・指導を通じた FD 活動を展開したい。さらには各 EP 担当科目の魅力ある授業づくりのための改善（授業方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等）をより一層図るとともに、科目の精選に関する考察を深める。

また、文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学が進めている併設高校との高大連携授業ではセンターが担当する部分が多く、関係教員との FD 活動を通じて、本学にとっても高校（生）にとっても魅力ある授業づくりを検討する。

(9) 国際人間学研究科

1) FD 活動の目標

- ① 構成員の専門分野が社会科学・人文科学に跨る多彩な学問領域であり、学生も様々な国籍・年齢層にわたるため、研究会・発表会などを通じて互いの専門分野についての理解を深め、多角的視点から専攻を超えた教育・研究指導を行える環境を育む。
- ② 2021 年度からの研究科横断的新教育プログラム導入を視野に入れつつ、本研究科として可能な貢献の在り方を検討する。
- ③ 学外の研究者や地域との交流による研究・教育能力の向上を図りつつ、学生の要望や意見もくみ上げながら「魅力ある授業」をつくりあげていく。
- ④ 様々な文化背景をもつ学生が所属することから、著作権・肖像権・個人情報保護等、研究

倫理に関わる事項について、まず教員が正確な知識を身につけ、これらの侵害がないよう指導を徹底する。

2) FD 活動の計画

- ① これまで継続的に実施してきた研究科の所属教員による研究報告（年 2 回）、学生とその指導教授による研究報告（年 2 回）を開催し、報告誌 **Glocal** を 2 冊刊行するとともに、教員間・学生間の相互理解や交流を深める。
- ② 学外から専門家・識者等を招き、シンポジウムや講演会などの形態をとりながら、教育・研究の向上に資する知識・情報・ノウハウの吸収に努める。
- ③ 国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各分野、また、それらを横断的につないだ分野でのシンポジウムや講演会の実施を促進し、その成果を「魅力ある授業づくり」に活かしていく。
- ④ 国際人間学研究所が推進している「持続可能な観光」プロジェクトと連携しつつ、研究科としての社会連携・地域連携をさらに推進する。
- ⑤ 上記の計画を実現するために FD 活動への積極的な参加を促す努力を継続し、研究科全体の FD 意識を向上させる。

4. 2020 年度の FD 活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2020 年度の全学としての取り組みは、大学企画室高等教育推進部ホームページに詳細が掲載されている (<https://www.chubu.ac.jp/FD/>)。主な取り組みは、(1) 教員による教員活動重点目標の設定および自己評価 (2) 授業改善の取り組み (3) FD フォーラム・講演会 (4) キャリアアッププログラム・FD に関する研修会等 (5) FD カフェ (6) 出版物 (7) 教育活動顕彰制度 (8) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムの実施 (9) FD オンデマンド講義（全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラム）の提供等である。なお、これらの現状と評価を記述する。

(1) 教員による教員活動重点目標の設定および自己評価

近年の内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についても評価・点検の実施、および改善向上が教員には求められている。このことを反映して、「教員活動重点目標・自己評価シート」では上記の 4 つの責務（教育・研究・社会貢献・学内行政）について、年度初めに各教員が教員活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2018 年度から大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更となった。2020 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 515 人中 502 人（未提出者 13 人は、欠勤等により提出できない者）、自己評価提出者は目標設定者 502 人中 492 人（未提出者 10 人は退職、欠勤等により提出できない者）であり、ほぼ全ての教員が提出した。

(2) 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 7 つに取り組んできた。

① Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

2020 年度、新型コロナウイルス感染拡大防止を鑑み、春学期はほとんどの授業が遠隔中心とした実施となり、対面授業を想定した設問項目は実態と乖離があるため、春学期は授業評価の実施を中止することになった。秋学期は遠隔・対面授業双方に対応できる

よう、設問内容の一部の修正および補足説明の追記を行ったうえで実施した。秋学期の「授業評価」の学生の回答率は約 37%であった。2019 年度秋学期の回答率は約 24 %であり、昨秋と比べて回答率は大幅に増加した。自由記述においては 2,673 件であり、こちらも 2019 年度秋学期より約 26 %の大幅増加であった。遠隔授業に対する学生の意見の多さが推察される。

教員の自己評価回答率は約 62 %であり、2019 年度秋学期とほぼ同じ率であった。一方、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、コメント教員数が昨秋と比較して 45 名増加の 517 名であった。さらにコメント率も 67.1 % (2019 年度秋学期 58.9 %) と格段に増加した。前述のように回答率は 2019 年度とほぼ同じであったことから、教員の対応が二極化していることが考えられる。

② 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供(授業改善アンケートシステム)

携帯電話やスマートフォンを活用して、授業中に教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである「Cumoc (キューモ : Chubu University Mobile Clicker)」を導入して 11 年目となる。2011 年 7 月には、利用の研修を行う目的で「CumocL」を整備し、同システムを活用して 2013 年 4 月に一般的なアンケートシステムとして学内に提供を開始した。また、2017 年度より、それぞれの設問間のクロス集計が可能になるよう改善した。

なお、「授業改善アンケート (Cumoc の利用を含む)」は、春学期 63 件、秋学期 40 件で合計 103 件 (2019 年度 135 件) の利用であった。春学期のアンケート数は昨年度の 82 件から 19 件、秋学期のアンケート数については、昨年度の 53 件から 13 件減少した。

③ 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業改善ビデオ撮影支援制度は、授業担当者からの希望による振り返りのための教育支援として撮影提供しているが、2020 年度は、申請がなかった (2019 年度 10 件)。また、「全学公開授業」は記録撮影が 1 件あった。

④ 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ること、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

⑤ 全学公開授業

「全学公開授業」を 1 件 (2019 年度 2 件) 実施し、16 人 (2019 年度 20 人) の教職員の参加があった。この公開授業では、ライブ発信型授業を行う様子を、受講生向けの画面も同時に視聴しながら対面で見学するという方法を採用した。

⑥ 授業サロン

専門が異なる学部を越えた 5 人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」は、教員の遠隔授業への切り替え対応への優先、新型コロナウイルス感染拡大防止に鑑み、学生への配慮等から実施取り止めとなった (2019 年度、春学期 1 グループ、秋学期 1 グループ)。

⑦ CU ルーブリックライブラリ

教育の質保証を目指す上での成績評価方法の1つであるルーブリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016年3月に運用を始めた。2021年3月末までに非公開を含めて30件の登録があった。

(3) FD・SD フォーラム・講演会

第52回FD・SD講演会「遠隔授業時代におけるハラスメント防止」（講師：葛 文綺・愛知学院大学 心身科学部 心理学科 准教授）を開催した。遠隔授業での学生とのトラブル例を取り上げながら、学生との接し方について詳細な説明があった。講演形式は会場での聴講とライブ発信のハイブリッド方法を採用し、94人の参加者を得た（会場：42人、オンライン：52人）。なお、2015年の講演会からは、テーマに応じて県下の大学をはじめ、他の大学にも案内を行っており、この講演でも学外から7人の参加があった。

(4) キャリアアッププログラム・FDに関連する研修会等

2009年度から開催してきた「教員キャリアアッププログラム」は、教員の授業スキルを含めた「授業改善」に関連したプログラムはもとより、「ICT（情報技術）」や「学生への対応」など幅広い目的をもつワークショップである。教職協同のプログラムとして、職員も参加し実施してきた現状を踏まえ、2017年度から、「キャリアアッププログラム」と名称を変更し実施している。

2020年度は23回開催した（2019年度は14回）。そのうち14回は大学企画室・教務部教員による、オンライン授業の実施に向けた「授業運営・ICT」プログラムを開催した。ほかに、当大学企画室客員教授による「授業技術（話し方）（伝える力）」（4回）および「授業デザイン」に関するプログラム（2回）、「学生への対応」（2回）に関するプログラムをはじめ、学内講師を招いた「学生への対応」プログラム（1回）を実施した。コロナ禍の中での開催であったため、ほとんどのプログラムをライブ発信形式で行った。オンライン実施ではあったが、グループ討論・作業を積極的に採り入れることにより、参加者間の交流やプログラム内容の習得を対面時とほぼ変わらないレベルで行えるよう企画した。

また、毎年行われる年度初めの新任教員説明会は、2020年度は実施されず、本学のFD活動を説明した資料を送付した。

(5) FD カフェ

FDカフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2020年度は春および秋学期にそれぞれ1回（2019年度は春学期に1回開催）、遠隔授業の授業作りに関する内容を開催した。

(6) 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』及び『中部大学教育研究』を刊行している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として、また大学の情報公開のための基礎資料として活用されている。後者は、1979年より刊行されてきた『教育資料』を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供するものとして、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から刊行している。

教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用される実績を有している。『中部大学教育研究』No.17 から論文の投稿区分を見直し、要約・キーワード・英文タイトル等の追加、およびレイアウトの変更と、編集・投稿要項を改訂した。2020年度は、No.20 として特別寄稿および研究論文 1 編、一般投稿 12 編を発行した。

(7) 教育活動顕彰制度

2008 年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰している。2017 年度に、中部大学教育活動顕彰制度における教育活動優秀賞の 4 回目の受賞者に対して「教育活動金虎賞（きんとらしょう）」を制定し、2019 年度初めて受賞者が 1 人あった。その金虎賞を含め、2019 年度の「教育活動優秀賞」は 10 人（2018 年度 12 人）であったが、一方で「教育活動特別賞」は、推薦がなかった。実施要項、選考総評等はホームページで公開されている。

(8) 『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FD プログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD・SD 委員会が主催している FD プログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやホームページ上で公開されており、3 年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2020 年度には 5 人の教員に修了証を授与した。本学の特徴ある FD プログラムへのさらなる積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

(9) FD オンデマンド講義（全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラム）

FD オンデマンド講義は、本学が加盟している全国私立大学 FD 連携フォーラムが運営している実践的 FD プログラムを活用したものである。同プログラムは、毎年 4 月に視聴希望者を募り、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、アクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2020 年度は個人 17 人、2 組織（2019 年度個人 18 人、2 組織）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動評価点検報告書が作成されている。その報告書から、2020 年度に、(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み、および (2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組みを実施した学部・学科および研究科を、その開催形式別に以下にまとめた。

(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み

- 1) 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・国際関係学部・人文学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科・人間力創成総合教育センター・国際人間学研究科）
- 2) 講演会・報告会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部・応用生物学部／応用生物学研究科・現代教育学部／教育学研究科）
- 3) ワークショップ・セミナーの開催（工学部・国際関係学部・人文学部・応用生物学部／

応用生物学研究科・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科)

4) 制度・システムの構築や改良、出版など（工学部、国際人間学研究科）

(2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

1) 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部・現代教育学部／教育学研究科・国際人間学研究科）

2) 講演会・報告会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部、国際関係学部、応用生物学部／応用生物学研究科・現代教育学部／教育学研究科）

3) ワークショップ・セミナーの開催（工学部・応用生物学部／応用生物学研究科・現代教育学部／教育学研究科）

4) 制度・システムの構築や改良、出版など（工学部、人間力創成総合教育センター、国際人間学研究科）

全ての学部・学科および研究科が、授業・教授法の改善や、教員の資質向上の双方を目的とする FD 活動を様々な形式で実施している。各組織の FD 活動が主体的に実施され、発展していることが明確である。コロナ禍における遠隔授業対策や支援が各組織において検討展開され、特に非常勤講師を含む ICT に不慣れな教員への ICT セミナー実施による支援や、FD 活動における学内の他学部との連携実施による情報共有など新たな試みについても実績報告があった。

4. 3 2020 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2020 年度の本学の FD 活動件数を、目的別、対象別、および内容形式別にまとめたものが次の 3 つの表である。なお、2013 年度以降、「会議」や「打ち合わせ」は当該データから除外している。

まず、目的別にみた FD 活動の件数（表 2.1）を見ると、総数ではここ数年と比べてやや減少したものの、授業・授業法の改善を目的とした活動件数が大きく増加した。オンライン授業への取り組みに関する企画が多く実施されたことを反映していると思われる。

次に、対象別の件数（表 2.2）については、コロナ禍の中にも関わらず、全学対象および学科・教育科対象の開催件数は 2019 年度とほぼ同数であった。特に、脚注に記載したように、非常勤講師を含む活動はここ数年一定数を維持しており、本学の特徴である常勤および非常勤講師が一丸となった FD 活動が定着していることを示している。

最後に、形式別の件数（表 2.3）では、研修会・懇談会与講演・報告会の開催件数が 2019 年度より若干減少した一方で、ワークショップ・セミナーの件数が過去 4 年間で最大数となった。FD 活動の形式が、座学スタイルの知識の修得のみを主眼としたものから、参加者の意見交換・交流を目的とした形へと移行しつつあることを示している。

表 2.1 目的別にみた FD 活動（件数）

目的	2020 年度	2019 年度	2018 年度	2017 年度
授業・教授法の改善	81	69	72	66
教員資質向上のための研究交流	50	66	74	39
FD 活動企画・運営	11	26	16	16
	142	161	162	121

表 2.2 FD 活動の対象別にみた FD 活動 (件数)

対象	2020 年度	2019 年度	2018 年度	2017 年度
全学対象	49	56	46	47
学部・研究科対象	19	41	39	23
学科・教育科対象	50	51	45	26
	118	148	130	96
* 表 2.2 のうち、非常勤講師を含む	47	44	51	40
* 表 2.2 のうち、学生を含む	29	53	46	21

表 2.3 形式別にみた FD 活動 (件数)

内容形式	2020 年度	2019 年度	2018 年度	2017 年度
研修会・懇談会	37	47	28	21
講演・報告会	27	54	63	44
ワークショップ・セミナー	37	24	26	16
制度・システムなど	25	17	16	19
	126	142	133	100

※ 上記の 3 表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受け、授業方法やスケジュールなどに大幅な変更を強いられることとなった。FD 活動に関しても、春学期の授業評価や春・秋学期の授業サロンが中止になるなど、一部の活動に影響が見られたが、オンラインツールの活用もあって活動件数はここ数年におけるレベルがほぼ維持された（「3. 2020 年度の FD 活動の重点目標」参照）。内容的にも、ICT 技術からコロナ禍での学生対応に関するものなど、現場での教職員のニーズに応じた内容が多く取り上げられた。

昨年度の報告書において「現場での教職員のニーズに応じた内容や切り口を採り入れつつ、企画内容を精査していくこと」が課題として述べられた。上記のように、2020 年度は遠隔授業などのコロナ禍での教育対応に関する FD 活動が中心となり、正に現場の教職員の意見や要望が反映されたかたちとなった。今後もこうした活動を継続しつつ、コロナ禍のため中止となった諸活動についても実施に向けて知恵を出し合い、将来のアフターコロナにおける展開につなげていくことが必要である。